「うちどく（家庭での読書活動）」推進の取り組み

足利市小中学校ＰＴＡ連合会
足利うちどく推進委員会

1.「うちどく」推進の経緯・趣旨
（正式名称：「学びのまち足利・『うちどく』プロジェクト」
～「学力と豊かな心と家族の絆」を「うちどく」で育てよう！～）

(1) 経緯

① 平成２４年度

・足Ｐ連役員会で、「もっと足Ｐ連のスケールメリット・パワーを活かした活動が出来ないか？」との意見が上がり、新規事業を検討する。
[それまでの足Ｐ連の主な事業・・・「行政への要望書」とりまとめ・提出、それに伴う「教育懇談会」の開催、「会長研修会」の開催（年２回）]

・何か「足利らしい」運動をとの意見が多数を占め、足利と言えば足利学校、足利学校と言えば古来より多くの学生が本を読んで学んできたことと、市内の小中学校で図書館改造の動きも始まり、漠然と「子どもの読書量日本一」を目指す方向で協議を重ねる。

② 平成２５年度

・6/20 県教委主催「家読フォーラム」に桑山会長が参加。三郷市教育委員会さんの講演「読書で育む家族の絆」を聴き、「うちどく」という切り口に感銘を受ける。

・11/8 足Ｐ連主催「教育懇談会」に三郷市教育委員会さんをお招きし、「日本一の『読書のまち三郷』づくりについて」のご講演をいただく。また、「うちどく」の仕掛けづくりをテーマにグループディスカッションを行い、全ての教育関係者に足Ｐ連が今後「うちどく」を推進していくことの周知と協力依頼をする。

・年度末に市教委が作成した「あしかがっ子学びのすすめ　学力アップ１０ヶ条」の第８条に「家族みんなで『家読』タイム」を入れていただく。

③ 平成２６年度

・５月足Ｐ連総会にて新規事業案同プロジェクトの承認を得て、本格的にスタート。

・市教委が「ノーテレビデー」を推進し始めたので、「ノーテレビデー」には「うちどく」を、と連携して進める。

・秋の読書週間に合わせ、「第１回うちどくコメントコンクール」を開催。
保護者、児童生徒、学校への「うちどく」の周知とともに、関心・意欲を高めるため、より気軽に参加、取り組める形式で実施。以降、今日まで毎年開催。

開催年度	Ｒ１	Ｈ３０	Ｈ２９	Ｈ２８	Ｈ２７	Ｈ２６
応募総数	５，６７８	５，３４２	６，２３０	５，０６６	２，３１８	３６９

・11 月に市教委・小中高Ｐ連共催ＰＴＡ会員研修会にて佐川二亮（つぐすけ）氏（家読推進プロジェクト代表）講演会を開催。

④平成２７年度

・「第２回うちどくコメントコンクール」の実施。

・県教委主催「子どもの読書活動推進フォーラム」にて事例発表。

⑤平成２８年度

・「第３回うちどくコメントコンクール」の開催について、足利市市民活動支援補助金を申請、承認（１１１，９３０円）。

・「足利市子ども読書推進計画」（平成２９年２月策定）において、具体的な取組として、「家読（うちどく）等を通した家族ぐるみでの推進」との方針が掲げられ、「うちどくコメントコンクール」の応募数が「評価項目」の一つに定められる。

⑤平成２９年度

・足Ｐ連の予算内での事業継続が困難となったため、実行委員会形式（外部組織）である「足利うちどく推進委員会」を発足し、行政他各種団体との更なる協働を促進。

・「第４回うちどくコメントコンクール」の実施。当年度より、「足利うちどく推進委員会」にて協賛金を募り、副賞等の開催費用に充てる。

・市教委が作成した『足利版「家庭学習の手引き」学びのすすめ』に「家読をしよう」を入れていただく。

⑥平成３０年度

・「うちどく」推進をテーマに、県Ｐ連の２年間の「研究ＰＴＡ事業」を委嘱される。

・同事業の一環として、「『うちどく』意識調査アンケート（第１回）」を実施。
（別添「うちどく通信第１４号」参照）

・「第５回うちどくコメントコンクール」の実施。

⑦平成３１（令和元）年度

・「うちどくのすすめ（マニュアル）」を作成、市内小中学生全家庭に配布。（別添資料参照）

・「足Ｐ連うちどくフォーラム 2019」を開催。　（別添資料参照）

・「第６回うちどくコメントコンクール」の実施。（別添「うちどく通信第15、16号」参照）

・「『うちどく』意識調査アンケート（第２回）」の実施。

(2) 趣旨

①市内小中学校ＰＴＡ、学校、行政、その他関連機関（県立足利図書館等）と連携し、子ども達の家庭での読書活動、通称「うちどく」を推進し、「生きる力」の主たる構成要素である「確かな学力」と「豊かな人間性」を育む。また、家族で本に親しみ、コミュニケーションを取ることで、家族の絆を深め、うちどくの時間を設け、家庭での生活習慣を見直すことによって、家庭教育力の向上を目指す。

②なぜ「足Ｐ連が『うちどく』」なのか？

近年、各学校等では「朝読書」や「読み聞かせ」等、子どもたちの読書の習慣化や読書への意欲を高める活動に取り組んでいる一方、家庭での読書活動が習慣化するまでには至っていない。子どもの読書週間は日常の生活を通して形成されるものであり、保護者が配慮・率先して子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たしていくことが必要であり、子どもの最も身近な存在である保護者へ、子どもと共に読書の楽しさを分かち合い、読書に親しむような活動を足Ｐ連として提案していきたい。

また、少子化、核家族化、共働き家庭の増加、個人主義の広まり、電子メディアの普及等で、家族間のコミュニケーション不足が問題となっている。しかし、うちどくをすることによって、家族のふれあいの時間ができ、コミュニケーションが増え、家族の絆も深まる。そして、うちどくの時間を設けることで、現在の子ども達がＴＶやゲーム、スマートフォン等に長時間携わっている生活習慣を見直すことができる。

それに、我が足利市は、かつて全国から学徒が集まり、多くの本を読みながら学んだ、日本最古の学校「足利学校」のあるまちであり、そして、ここ数年来、市内各校で学校図書館の充実を図る取組が多く見られることもあり、全市的に読書活動に対する機運も高まってきていると思われる。

今こそ、「家庭教育力の向上」のため、保護者の代表であり、集合体である足Ｐ連が旗を振る必要がある。

２. 栃木県ＰＴＡ連合会「研究ＰＴＡ」事業への取り組み

(1) 事業概要　（別添「研究計画書簡略版」参照）

・期間は平成 30-31 年度の２年間。年間２０万円、計４０万円の補助金あり。
・令和２年度の栃木県ＰＴＡ連合会総会(6 月)、日本ＰＴＡ関東ブロック研究大会とちぎ大会(11 月)にて研究発表。

(2) 研究計画の実施状況（２年間）

計画内容	実施状況
研究計画の策定	○
足Ｐ連の諸会議、学校長会での説明、研修	○
足Ｐ連「教育懇談会」「会長研修会」等での研修	○
「うちどくのすすめ(家庭での取り組み方マニュアル)」の作成・配布	○(令和元年７月)
「うちどくデー」の市内一斉実施	×(具体的な推進方法を要検討)
「うちどくコメントコンクール」の開催	○(第５回、第６回)
足利市立図書館まつりへの協力(コメントコンクール表彰式、ビブリオバトルの運営手伝い)	○(第３回、第４回)
「うちどく通信」の発行(年２回)	○(第１２～１６号)
「うちどくフォーラム」の開催	○(令和元年１１月)
学校図書館の整備支援(随時)	△(整備実施校はあるが、具体的な支援は出来ていない。)
学校図書館の貸出数･利用率の調査研究(協力校)	×(協力依頼まで手が回らず)
「うちどく」に関するアンケートの実施	○(第１回平成３０年９月実施、第２回令和２年１月実施)
「ビブリオバトル出張講座」の開催	×(実施体制の整備、学校への協力依頼後、来年度以降実施予定)
研究のまとめ、研究紀要の作成	△(第２回アンケートの集計を経て、今後実施予定)

※「ビブリオバトル」とは、おすすめの本を持ち寄り、本の魅力を紹介し合う書評ゲーム。

(3) 第１回アンケート結果による「『うちどく』推進」の現状と課題

（別添「うちどく通信第 14 号」参照）

①「うちどく」の認識

・「うちどく」という言葉を知っているとの回答が約８割あり、各小中学校ならびにＰＴＡや行政他各種団体等のおかげで、だいぶ当活動も浸透してきたと思われる。

・「足Ｐ連が推進している」ことを知っているとの回答が約６割に留まっているのは、足Ｐ連と各校ＰＴＡがもっと「うちどく」をＰＲする必要がある。

②「うちどく」の目的の認識

・目的を知っているとの回答も約６割に留まり、ＰＴＡだからこそ「うちどく」に携わる意義（家庭教育力向上）を改めて訴えていかなければならないと考える。

③「うちどく」の経験・方法

・「うちどく」をしたことがあるとの回答が７割弱あり、やり方については、一緒の本を読む、読んだ感想を話し合う、おすすめ本を教える等、各家庭で様々に取り組んでいる。ただ、日時を決めて本を読むという回答が少ないのは、保護者の忙しさ等で時間を共有できていないことが伺える。

④「うちどく」の効果

・子どもとのコミュニケーションが増えたとの回答が５割弱あり、本をより好きになったり、本を読むきっかけとなった、との回答も多く、当事業の目的がある程度達成されていると考えられる。一方、「子どもの学力が上がった」と答えた保護者は僅かであった。ただ、小学校低学年においては、語彙が増えた、漢字を覚えられるようになった、等の回答も多くあった。

⑤「うちどく」をしない理由

・忙しくてする時間がないとの回答が圧倒的に多かった。子どもは部活や習い事、スポーツ、勉強・宿題で忙しく、保護者は仕事や家事等で忙しくて、「うちどく」する余裕が無い。また、やり方がわからないとの回答が２割強あり、「うちどく」のやり方を改めて報する必要がある。さらに読む本が家に無いとの回答も多く、学校図書館の充実や保護者が気軽に本を借りられる場所の提案も必要である。そして、そもそも子ども（保護者も）が本に興味がないとの回答も多く、本への興味を惹かせる更なる仕掛け・仕組み作りが必要である。

⑥「コメントコンクール」への応募

・応募したことが無いとの回答が 5,800 もあり、今後より一層の広報活動、各学校・各校ＰＴＡ・市立図書館等との連携強化に努めたい。

⑦「うちどく」推進に必要なこと

・「うちどく」の更なる周知・広報、学校図書館の充実との回答がそれぞれ３割強、保護者が本を借りる場作りが２割強あった。また、保護者の意識改革(率先垂範)との意見も多く、足Ｐ連ならびに各校ＰＴＡによる地道な訴えかけを続けていきたい。他にも、ビブリオバトル等の活用によって本への興味を惹かせるとの意見を多くあり、その普及の仕組み作りに努めたい。一方で「うちどく」を一律に推進することには、様々な家庭事情を鑑み、一定の配慮も必要であるとの意見もあり、留意していきたい。

⑧１ヶ月の読書冊数

・子どもも保護者も「1～5冊」との回答が約６割と一番多かった。また、「0冊」という子どもが約１割強(小学校 11.3%、中学校 16.6%)であった。

[参考]不読率(１ヶ月に本をほとんど読まない児童・生徒の割合)

	小学５年生	中学２年生	調査年度
栃木県	７．０％	１４．６％	平成 30 年(「栃木県子どもの読書推進計画」推進状況調査)
足利市	１７．５％	２４．７％	平成 28 年(「足利市子どもの読書推進計画」策定時の実態調査)

３．今後の活動

(1)「うちどく」の更なる周知・広報

・「うちどくコメントコンクール」の開催(毎年 10～11 月)　→　各校の温度差を解消するよう、校長会、図書担当教諭の会議、足Ｐ連会議等で丁寧に説明していく。

・「うちどくデー」の実施　→　各校・単Ｐが簡単に出来ることを働きかけていく。

・活動内容の発信　→　「うちどく通信」の他にＳＮＳやホームページ等を通じて対外的にも発信。

・市立図書館との連携強化　→　うちどくコメントコンクールやビブリオバトルで紹介された本の展示等。

(2)「うちどく」の環境整備

・学校図書館の整備支援(随時)

→　子どもが家庭でたくさん本を読むためには、学校図書館の充実が不可欠。図書館ボランティアの立ち上げや活動の更なる充実を「あしかが学校図書館よくし隊」や「ＤＳＰ(読書推進プロジェクト)」と連携して進める。

・保護者向けに本を借りられる場所の情報提供(「うちどく通信」、ＨＰ等で)

→　市立図書館の情報や公民館の図書コーナーの情報等。

(3)本への興味を惹かせる取り組み

・「ビブリオバトル出張講座」の開催(来年度以降)等。

以上